

Utopiaについて

月 光 恵 雲

(I)

ユウトピア (utopia) とは, *oû* (*not*) と *τοπος* (*place*) とを組合せて, *oûτοπία* のラテン語の形である。即ち現実には存在しない所である。

その事はユウトピアの作家, Thomas more の友人 Erasmus 宛の手紙の中に, Nusquam のラテン語でユウトピアを指している。その意味は英語の nowhere (何処にもない) である。現実ばなれをした考と現在は意味している。

More は英国のヘンリ八世の大法官であり, ローマカソリック教の大信奉者であり, ヘンリ八世が宗教主宰者であることを宣言し, ローマ法皇との関係を断ち, 国教とした時に反対し, ヘンリ八世によって1535年の5月に断罪に処せられたのである。一方では, More は有名な Thomas Cromwell によって追われた事も事実である。Cromwell は More の誠実さに反し, マキヤベリ一的政治家であり, 二人は正反対の性格であったように思われる。More が Utopia を書いたのは, 1515年であり, 1516年にラテン語で出版され, 1551年に英訳されている。

その内容は, Raphael Hythloday と名づけられた老船乗りの物語として述べられている。アメリカを越えて, 遠い島ユウトピアにヒスロディが到着した。そこは英国の現実の不満や, 政治上の誤りとも言うべきものが解決された理想の島である。それはカソリック教信者が, プラトンの国家の理想を実現したならば, 多数の人々が救われると共に正義が行われるとモアが考えていたように思われる。現実を越えた苦悩のない社会理想の実現を夢想していたのであろう。換言すれば, プラトンの「国家」の六巻の中で国家を船に例えているので, モアが老船乗りのヒスロディの物語ユウトピアを著述したのも, プラトンを信奉していたことを物語っているのであろう。常に理想としている社会像の実現を熱心に論じているのである。それが歴史的具体的現実社会の発展像として考えていたとも言える。プラトンの正義観を中心として社会観を形成し, ギリシャの建築の中の寺院は, ギリシャ理想国家の表現である。然し, 快樂主義的民衆の願いに鋭く対立するものである。現在の具体的世界の社会で, 国家の経済と, 法が人間の幸福の実現の可能性は全くないとは考えられない。冒険家の万一の可能性の予知によって, 冒険を遂行するのに等しいものと言われる。

ユウトピアの思想は, 歴史的にさかのばれば古代ローマ人も, 全くギリシヤ的考え方がなかったとは言えない。共和国時代のローマ人の考え方は, 矢張り東方の思想の継承者と言えないこと

はない。バビロンでは、天文学的発想からすべての地上の生命の発展や、人間禍福を支配するものは星であると考えた。またエジプトでは太陽によって支配されるとし、太陽崇拝が生れている。此のような考え方は、近東を越えて広がった。星の万有力の信仰は、内部論理を形成している星の不変の法則があり、その中で星の軌道が地上にもその変化が影響し、人間の運命を支配するものと考えられている。人間史の始めから終りまで星の変化のリズムによって、生成経過を支配されとの考え方による地上の終局を救済不能であるとのキリスト教の終末論と反対のものもある。

猶太教の予言時代に終末論に対して、救済可能の希望が世界史的に有効となって来た。追放前後の猶太人の予言者や説教師の熱狂的恐怖と宗教的法悦の中で、バビロンからイスラエルに移行したバビロンの終末論の意味は救済不能でなく、倫理的、宗教的と同時に猶太的、民族的に現世の罪もなく、辛苦に耐えねばならぬ民族の救済と、報償の意味が加えられるようになった。即ち神の思召のままに生活する時に、神にまで高められ、将来のメシアの主人公として、歓喜と栄光に輝く天国、換言すれば、世界の破局から救済されとの終末救済論が生れたのである。猶太人で救済が始まり、世界の人々の救済可能であるとの思想が、広がったのである。

ペルシヤの終末論の中に、不死の人間となる準備として、幸福の時代の始まりを用いられた考え方に会う。新しい救世主の出現と、死人の再生が考えられる。イスラムでは、感覚的に彼の世のパラダイスの幸福が、信者のすべての地上の辛苦は、此の世の終りに報酬として約束されると考えられた。神によって決定された信者と選民支配の思想が、イスラエルの神の国の中に含まれて、世界に広がったのである。これが中世キリスト教の考えの基準となったのである。

キリストの出現は、彼の使徒たちの未来に幸福がもたらされとの信仰を破壊することは出来なかった。此の最も神秘的願いが、ますます大きくなり、ユダヤ教の黙示録の中で、ヨハネの信仰の賛美を見出す事が出来る。一方同じ時代にユダヤ教的、キリスト教のみこの本（シビレン）の中の三巻の第一行に、西方に未来の極楽の教えが伝えられ、ここに信仰団体があることを発見されている。その以前にアレキサンダーの時代以後の、東洋と西洋との交流によって、ヨーロッパ思想圏の中に東洋的考えの入口が開かれた。異教徒のアレキサンダーの像は古代バビロニアやエジプトの王のように生前に神格化された。そうして沢山の伝説が生れ、同時にギリシヤのユウトピアが新しい形を持つようになった。それは種々の起源を持つユウトピアの救世主の考え方を統合して、ペルシヤ王Cyrusの考え方と異った未来の幸福な時代の使者として、広く伝統の中に浸透していった。みこ（シビレン）のわかりにくい言葉と、アレキサンダーの神話から福音の確信時代までの、すべての新しいものが吸収された。恐怖を共に経験した国家社会の混乱後、パラダイスの幸福の新しい物を作り出した。その時、Nehyia ローマ王は救世主の役割を演じさせられた。ローマのオーガスタスは、精神化されて救世主化した。その事は広い範囲の人口に信じられ、地上にさまよい、辛苦している人々の再生の報いとして、キリストが降臨して千年王国を出現し、世界支配によって全人類の平和と和合を約束するのはキリストである。そのように再生と神となった人は、古代の末期の救世主を希望しつつづけている人々によって待望された。オウ

ガスティン以来、地上のイエスによって約束された神の国の漸次的発展と、カソリック教会の内面的完成と拡大による世界支配へ参加するように人間教育を伝えている。早期の千年至福説は小アジアから世界中に広げられた。ローマ帝国はキリスト教で平和をきづいた。世界を支配している法王の救済を期待することになるが、政治的分裂の克服者、キリスト教の希望は十字架の下に、世界統一によって共産主義の平和な社会生活像が、ますます明らかとなった。特に聖書の創世記の考え方から、ゲルマンの原始時代の考え方、東洋的神話から、遂にはイエルサレムの使徒団の考え方、時には文学の回想から混合された共産主義の神国の実現への希望となった。中世の政治的、社会的不安によって急進主義のフス教徒によるその実現運動は激しくなった。キリストの思想や、千年王国の思想のオウガスティンの歴史的型框をはずしたことに対立し、Goahin Von Fiore は異端として説明された教、即ち地上の発展の目標として信者の千年王国の教を非難したが、将来の第三の王国の位置を設定し、救われた者のキリスト教の宗教王国の克服することを約束する。内面的変化し、説明され、完成された王国、それは教会の外から恩寵手段を必要としなく、キリスト教会を聖軍の代りにする。王国はキリストの出現によって克服された。

将来の世界救済の王について、ダンテの信仰と関連がある。ブルダハの研究によって示されたイタリアの宗教的、国民的革新に対する熱狂的期待、ローマでは人間最高の宗教帝国の設立、新しい世界的、宗教的支配の中で精神化された Melchisedeh の修道会の中に融合された。Rienzos と Petrarca のように黄金時代の完成と再生を信ずる予言者が直接目の前に現われ、未来の幸福の担い手として伝えられた。勿論ライヒバーク、フォン、ゲホオギの提案の予言者の、悲観的警告はある。ヒイルドガードとブリーギタに対立して、地上に可能な限り増加している世界の罪に対して、救済の可能性はない。若い裁判官は恐怖して、再三、再四魂の中にある無改悔を槌で打つが、魂から無改悔を押し出すことが出来ない。少くとも、我々の見る限りでは、地上の世界では中世のキリスト教徒のあこがれは、我々が見たように極楽浄土の中に入る夢を持つことを中世のキリスト教の篤信者は強く求めた。近東では十字軍として物的、精神的に再び開明された。その世界へのヘレニズム的あこがれが安定し、プラトンの国家理想の想起が一時的に現われた。然し、その実現を試みられることはなかった。ルネッサンスによって発見された視野空間の拡大にともなった新しい世界でもなく、前時代のままの生活であり、幸福感も変らなかった。この事がモアのユウトピアの著作の機会を与えたのであろう。第一にルネッサンス人や、人間主義者の世界で、神の意志による先験的目標への神の誘導と、地上での発展の強制、彼の世で、可能な未来像の侵透による現在の価値に対立した狂信的信仰が減少して来た。

第二にはユウトピア、千年至福説の相互接近について、ルネッサンスと、宗教的革命以後の時代では時々の融合と分離があることの分析は大へん魅力あることを明らかにせねばならぬ。ルネッサンス運動の終りに近いモアの作品は思慮、幻想、智性の精神の運動として同意者を多く見出すことが出来るが、苦痛の証明の表現、又は不可能な願望の表現ではない。それは原始キリスト教の状態と同じであり、人間主義の方法によって再現されているのである。その当時の千年至福説の希望と過激派の未来の神の国の近いことに対する期待、フス派、改良派の運動は Thomas

Münzer によると、再洗礼、原始又はその後の猶太教の救世主願望、ヨハネの福音の強力な動きによって、宗派の使徒団の生活の伝統によって養われる千年至福説に到達することが出来る。

妄想と信仰の不思議とを混同することにある、天から降った新しい選民 (Zion)、後の猶太教の伝統が欲したように、ミュンスターに移し、世界の正しい人の支配を確立したと妄想し、此の試みは意外と燃え上った時、決して消えない。その基礎となっている考えは、いろいろな場合に働く。ドイツ、フランス、オランダ、英国に於いて広く展開され、他人の受け売りする信者が発見された。十七世紀の英国の革命運動の中で、未来の救済が、神の国の到来と期待の支持者の堅固な信仰、千年至福説の概念がある。それが英国の革命運動家に強い行動力を与えた。クロンウェルも同様に、千年至福説に情熱をわかした。その実際的実現を思いきって企てた当時、その聖戦に参加したドイツのプロテスタントは、近い将来に千年至福の王国の実現への試みを行った。その一定の輪郭をえがくことは、一定のその具体的概念を完成することが出来る此の理念の限りない力で、驚くほど活発に再三、再四大思想家に影響を及ぼしているところの不思議な力について何も解明されていない。モアの直接の後継者や模倣者はユウトピアの歴史の中で作品と共に現われ、黙示家や予言者としてしか見られない。

ピタゴラス、エムベドクレス、聖ヨハネの故郷カラブリン、その上黙示期待の温床の地でトーマス、カムパネラが生れ育った。彼はテレシスに支持されていた。アリストテレスや、国教会信仰や、あらゆる主権主義の否認は、中世のカソリック改革派の熱烈な信仰で養われ、新カント派の思い出と汎神論—自然哲学の認識によって高められた宗派教学の継続と対応する。病的なまでに彼の自我意識は高められた。彼は外国支配の母国、ナポリの救世主の役割と神によって、定められた救済と解放を求められている一地域を与えられることを夢見た革命の試みを急ぎすぎて、十年の刑に処せられた。その期間中に自己矛盾を追求し、当然の結論を引き出した、一方で未来の救世主としてヨハネの穏当な役割で満足したが、救済概念の広さをますます増加した。彼は一定の理念に非常に奴隷的に従っていたので、彼は無頓着に魂の尊厳や、外部事情でスペイン王に王冠を渡した。すこし前までスペイン王から王冠を奪うことに着手していたのだ。

然し彼は未来を見て、世界の王は星の中や聖書の啓示の中で、世界の歴史的、経験的、形成の中にかくされている神の意志、人間の神哲学によれば法王である。ダビデ家からの救世主と法王の王国は一つであると考えた。スペインの同じ王とカンパネラとはイタリア支配で戦った、世界の克服とキリスト教化を目的として命令の執行者、法王に従った。形而上学的、倫理的世界の基礎力に対応して、彼は伝統から神秘的な力を取り去った。理性、意志、又は力、感情を全能の司祭の行政領域の中に納められた。キリスト教化した世界巨大国の個人の生活は微細に規制し、その行為の全てを監督する。彼の言うように統一した自然宗教の勝利を生じた。世界史の事件の、気高い目標とするものの前に、間もなく起る事件の徴候が明らかになる。それを示すのに役立つのは神の思召と信じ、自然に個人の自由は消え行き、個人の幸福感と個人の要求、神の国の目標は支配が第一義でなくて、神の栄光の勤めであると。

カンパネラは他の人と同様に、キリストの復活から黄金時代だけを期待しなかった。言葉の流

通している意味で chilia であることを力調した。それ故に教会の教権から分かれた。又、人間への説教者の作用、その限りでは彼は啓蒙時代の新しい理解と、合理主義への転換を導き出した。人は彼の基本思想が投獄からの救済によって、発展を停止したことを発見した。

フランスで書かれた最後の作品の中で、彼の内面真実とその完成の必然性に疑いを認められなかった。またモアーのユウトピアからカンペネラの太陽の国を区別された。然も人は恐らく次のように言うであろう。社会理想はなまけ者天国の童話像からばかりでなく、合理的に制御され、精神化されたユウトピアの住人の幸福論から築き上げられた、カンペネラの、理想国のピラミット構造物は、全ての構造よりはるかに到達しにくいところに置かれている。ジャムブロスの旅行記から彼の作品名を除き、モアーの作品からその作品名を取り去るならば、外部形式と個性を得ることが出来る。その本質によって等級がつけられる。同じように上から唯一の光源、太陽神の鋭く燃えている光線は寺院を照していることを彼は示した。同じように区分された、広く十分に楽しい、柔らかい光の晴れたやすらぎからひどく異っていた。その光は、モアーのユウトピアの上に輝いていた。そこに神の国と教会組織は、個人の幸福を無慈悲に犠牲にされ、適度のエピキュラスの幸福論、一般的幸福を各人に同等に配当することを約束する。そこに叙述の中で、装飾とロマンティックな付属品の不足を物語り、冷静な性格となった。多くの色彩のはなやかさ、親しみ深く流れていて、迷わせる魅力のある物語、階層制度と民主制、狂信者の態度は彼の理想によって改良されるが、その完成を信じない。ロマンティックな理想、彼は皮肉屋で、気分や気ままに自由に処理し、遊び、物哀しい、懐疑的笑いで実現能力を除く恐れのあることを知っている。第一のラテン語の出版の中で、カンペネラの作品集の一付録として太陽の国が出版された。時々彼は精神的休養の作品を発表し、その中で論理的、組織的思考が高められ、その強度さから親しみ深さによって解放されることを求めた。即ち冷く進行している証明の中に、ユウトピア物語をさしはさむことに成功しなかった。たしかに狂信的なカソリックの太陽国家の絶望的な試みをシュヴァベン、ヨハン、バレンタイン、アンドレ等はなした。そのことはカンペネラの出版者、彼の友人アダミによって知らされた。シュヴァベンの中産階級の中に、プロテスタントの信心の中にそれ等をさしはさむことが出来た。ヴェテンバーグのプロテスタントの、狂信者の団体が生れた。それを太陽の国と名づけられた。そうしてキリストの愛の成果、尊敬すべき仲間からの助けを与えられた。然しこれは単なるエピソードでしかなかった。三十年戦争の激動の時代と、次の貧困と苦労の時代に、強くわき立ったドイツ千年至福説の古代の形式と、英国やフランスから押し寄せた啓蒙主義とのねばり強い対立、そうしてスペンサ、ベンガルのプロテスタントの敬虔主義の中に、その培養基を見出した。それに対して、カソリックのドミニカ修道会士のカンペネラの人間救済者の来るべき世界王国の教えは、密集した社会にきびしい規律の中で、私有財産もなく世俗的欲望もなく、進行している極楽生活の維持者として、重要な影響を及ぼした。一例として、Comenins に次の事が思い出される。啓蒙者は神が告げた全ての予言の声を心配して注意して聞いた。それは終末の接近と、善良な人々の千年王国の始まりを告げた。

ライブニッツは、未来のキリスト教の社会形式として、神権政治を期待し、力によって全て

のキリスト教徒の集結の理念を実現することを求めたライブニッツに始まった啓蒙主義は、人間主義精神と、自由の王国の中で、神の理念が最高に展開することを、目標として継続的、内在的に、ゆるやかに高まって行くことを期待した。ユウトピアの原型により考え出され、ロマンテイクに描かれた社会理想に到達することを求められたのは、フランス合理主義である。Morellyはルウソーに基づき、プラトン以来始めて共産主義の社会理想を、あらゆる修飾的なものを取り去り、自然法的前提から論理的に発展することを企てた。それがユウトピア的、合理主義的、建設的、イデオロギ的、フランス社会主義への序曲となった。

19世紀前半に理想的な社会像が人間によって、実現の可能性を倫理的、論理的、推論から予想する事が出来た。なかんづくサン・シモンによって千年至福説の未来信仰が加えられた。それに対して、古代ユダヤの千年至福説の時代相応の出来事が影響を及ぼした。

自然科学の進歩の啓蒙時代に狭い範囲であるが、救世の可能の夢が生き続けていた。戦争、経済的、道徳的の社会衰微は、神より益々疎遠の象徴と考え、神の国の接近の予知とする。この世界の終末とし、神の救済の接近であると推論を正当化するに至った。第一次世界大戦後、キリスト再臨説論者の聖書研究や千年至福説の研究が盛んになった。古くなって片隅に投げ捨てられた千年至福説が先祖返りし、そこに現在の経験が注意深く持ち込まれ、ユウトピア的願望が、明らかにすることが望まれるようになった。ナポレオンの世界王国、全スラブ主義、アメリカの世界経済支配、ムッソリニ、ヒットラーの全体主義に至るまで世界救済の平和王国の原始時代の理念は、その底に流れている。極言すれば、アメリカの日本占領政策の日本憲法や社会福祉政策は、千年至福説の人間の実現可能性の地域的、限定的、試験と言い得るであろう。

人はそれを理解するためには、18世紀の精神性から出発せねばならぬ。更にドイツの啓蒙時代の理神論は、神の意志の発展目標に向って人間の絶えまない進歩を認めるが、聖書的、教権的に固執しなかった。再臨のキリスト、または代理の英雄によって、影響の及ぼされる救済の位置に、神の国から影響され、養われた法則によって支配されると考えた。自由な、幸福な社会へと発展する新しい人間主義の理念の意味で教えられた純粋な内在的な、自然な、法則的な概念への道は、同じ方向であった。前以て定められた目標への傾向から、完全に解放され、自由に発展するとの進歩の理念が現われた。それはレッシング、カント、フィヒテによって明確に表明された。波形、またはスパイラルな経過の規則正しい完成の強調によって、サン・シモンの史観が完成されたが、ヘルデルの解放されない概念は個別的、平等の権利の国民性を示すことの出来る神の考えと、他の考えとの間に継続的、不均衡な矛盾がある。ドイツ理想主義哲学は、此の矛盾の解明の完成をなした。すなわち世界の事象の経過過程の中で、天上界の権力との創造的な関係は、完全に遮断された。要するにヘーゲルは、正、反、合の過程の中で完成された精神の自由意識までに自己発展の過程を明らかにした。

それ故にヘーゲルは、特有の形の原則即ち内在的地上の発展の原動力を発見したと信じた。カール・マルクスは、全ての事象の時代経過の思考形式や、全ての内在形としてと同時にヘーゲル辨証法を余りにも特有のものとして、世界の形式や、思考の形式の内容をひっくり返して、

自己展開している精神の代りに、自然の要素や世界史の発展の特有の原動力として、物質世界の生産力を充当した。此の過程の終りに、純粋な地上の歓喜を発見した。それが彼の世とのすべての関係の放棄となった。世界救済の主人公や、救世主の代りに奴隷いや被圧迫者の大衆を置き、全人類の代りに彼等に、最終の幸福の案内の積極的役割を与えた。

また階級分裂、内面的苦悩、悪、資本主義から解放された人間を認めた。即ちエンゲルスは科学社会主義のユートピアと述べているように、千年至福説を認める未来の知識を示した。来るべき終末の幸福を彼の世に固定した千年至福説の主観的知的信念の代りに、論理的、現実的知識は、個別的に啓蒙されたものの中に忠実に生きるために、内面的必然性と、その本質が分析されることの出来ない基本形から、人間発展の自然律に進められ、内面的に異った力と、自己保証の純粋な予言者の信仰の確信に関係のない、信仰の保証を記される力強い信仰の継承を強く求められた。マルクスの社会主義の衝撃力は、複雑な現実の組織内容から、決して説明されることは出来ない。希望の王国に間もなく入ることについて、疑う余地のないように思われている。現代の科学技術の発展は、新しい現実的千年至福説としての原動力となろうとしている。

(II)

前述の Utopia は Chiliasm (千年至福説) の変化の立場から眺められたものであるが、これを政治的立場から、即ち被圧迫階級の政治的自覚の発展段階として眺めたのはカールマンハイムの四形式である。

1. ユートピアの心的性質の第一形式
2. ユートピアの心的性質の第二形式
3. ユートピアの心的性質の第三形式
4. ユートピアの心的性質の第四形式

第一形式はキリスト教のフス派、Thomas Münzer、再洗礼派の中に千年至福説が特別な社会層の中の実行運動になった。その頃までは特別な運動目標がなかったのである。けれども社会の被圧迫階層のユートピア的心情は、精神的緊張となった。被圧迫階層の政治参加意識が生れて来たことである。即ち中世後半の社会過程の中に、運動機能の一の機能を持っているように低階級になり、社会的、政治的意義の自覚に段々と接近しつづけた。けれどもまだプロレタリアの自覚に至っていなかった。社会過程全体の動的発展の中での、被圧迫階級の役割が明確になって来たのであるが、歴史の一決定要素となる程ユートピアの心情が力強くなっていなかった。社会構造の特殊性のために、中世の封建社会は革命を知らなかった、革命的政治変革には常に千年至福説を付随したが、啓蒙主義時代となると、ユートピア観に合理主義が浸透し始めた。現存の制度との闘争から、自由人間主義者のユートピアが生じた。その特色ある形式は、第二形式である。それは悪の現実から区別せられる、正しい合理的概念を確立することであるが、世界の再建の青写真として用いられなかった。現実の事象の単なる評価基準である。自由人間主義者のユートピアは理念である。むしろその理念はプラトンの静的理念を原理としているが、プラトンのものそのもの

ではない。未来の基準としての形式的目標と考えられた。それは外部的でなく人間の内部構成の中にその進路を求められた。自由なものの基本的態度は、文化の積極受容と、人事へ倫理的傾向を与えることで特長づけられる。千年至福説にとっては精神は、我々によってそれ自体を充たし、表現する力である。人間主義自由論にとって、我々の道德意識の中に吸収された時に我々を感銘させるものは、それ以外の領域である。理念は世界再建に熱中したフランス革命前後に、その時代の活動を直接に指導した。自我意識を最高度に到達させることを企てる理想主義哲学に最後に達するのに政治領域から文化生活のあらゆる方面に、現代人間主義理念が浸透した。現代哲学の歴史の中で最も盛大な時代は、人間主義の発生と拡大の時代である。それが政治的領域の中の特別の範囲に限定され始めた時に、哲学のこの特別の傾向は、自由人間主義者の見解に適しているが、分解し始めた理想主義哲学の運命は、その主唱者の社会的地位に非常に密接に結びつけられているので、我々は此の関係の中で最も重要な段階を指摘することを怠ることは出来ない。その社会的機能に関して、現代哲学は世界の神学的見解をくつがえすために生じた。

絶対君主とブルジョアジーがその考えを採用したが、それは後にブルジョアジーの文化と、政治の武器となった。絶対君主制はその理念を拒否するようになり、プロレタリアはその理念から解放されるようになった。現代の自由思想は二重の戦いを経て、特別の創造物となったのである。ブルジョアジー自由主義は余りに規範に把われすぎているために実際に適用しなくなった。それ故にそれ自体の世界を作るに至った。自然と同じく物質世界に対してすべての感覚を失ったのである。此の意味関連において、自然は善悪によって規制された物の状態を意味した。大部分の他の時代において芸術、文化、哲学はユウトピアの表現でしかなかった。千年至福説は中世の世界で盛になった。何故ならばあらゆる人々が相互に戦いつづけたからである。千年至福説の経験は、社会の被圧迫層の特有の経験であった。社会変動は武士階級を役人、自由民を従順な市民に変え、社会制度の中で低階層の表現としてのユウトピアは出現せず、中間階層のユウトピアの出現となった。自由主義的理念は、千年至福説的見地から抽象的であったとしても、現代史の最も重要な時期の一に生命を与えていた。自由主義に対立する保守主義の時期として区画された第三期である。保守主義は理論化の傾向はないのである。即ち、世界秩序の問題は起きていなかった事になる。

かような保守主義にはユウトピアは存在しないと言われる。即ち、その構造において完全な調和を見出し、進歩的衝動から生ずる歴史過程の反省を欠いているのである。時代の状況の中に内在している習慣的、反省的志向から保守的知識は成り立っていて、実際の統制を与えている。此の段階では思想は具体的状況を問題のないものとして受け入れる。現実の秩序に対しての攻撃は保守的、歴史的、哲学的反省を生ずることになる。保守主義は、啓蒙主義時代を特色づけた自由主義理念を空虚な具体性のないものと見なした。次に第三の型は、社会主義—共産主義者のユウトピアである。社会主義—共産主義者の思想や、経験の型は一の統一体として三方面から観察されることによって理解されやすいのである。

一面社会主義は自由主義理念を更に過激なものとするものである。他面に於いて極端な無政府

主義に打ち勝たねばならない。その保守反動として考えられる恐れもある。此の点に関して注意されねばならない。共産主義者は、保守主義者よりも修正論者に対して精力的に戦わねばならぬ、社会主義—共産主義者が、保守主義者を多く理解しておらねばならぬことの理由が明らかになる点である。社会主義のユウトピアの要素は二面性を持っている。それは妥協ばかりでなく、種々のユウトピアの内面的総合による、新しい創造物であることを示している。自由と平等が将来実現するとの点では、自由主義のユウトピアと一致している。

然し社会主義はその実現の時点を経済主義の崩壊の時点とする。その目標志向において、自由主義理念と社会主義理念との連帯性は現存の制度を直接、間接的に肯定又は受容する。保守主義に対立することによって説明される。

その目標の精神的であることや、不明確さは社会主義者や自由主義者の千年至福説の喜びや、潜在的熱狂力が文化的理想によって、浄化されねばならぬとの、共通の認識に対応する。

問題が進化過程や、理念の漸次的発展の中へ、理念の浸透の問題である限り、社会主義者の心は精神浄化形式の中で、その経験をするのではない。目新しい理念に直面した時、その知識は科学研究の目標となることが出来る。それは全体過程の中で、一定の機能の具体的生活を持っている。それが時代おくれになった時衰微して行くのである。その社会過程が一定の構造上の場に到達した時にそれが実現されることが出来る。現実との関連がなければ、それは漠然としたイデオロギーとなる。人が自由主義的なものに向かった時、保守主義的なものと異った将来の展望が開けてくるであろう。単なる意見や理念像は不適切なものとして対立者から攻撃されねばならぬ。社会主義は現実根ざしたものであり、実現可能性を示して反対の主義者を減すことを企て、イデオロギーの分析の中で筋の通った批判的方法を用いる。社会主義者にとっては、社会の経済社会構造は絶対的実在である。それが文化全体の基礎となり、保守主義の考える統一体としての民族精神の源であると考えられた。此の世の歴史的、社会的状況との密接な関係を完成するところのユウトピアは、歴史の枠内に、その目標を奥深くに入れることだけでなく、直接に接近している社会経済構造を精神化することによって、その近似性を示すのである。

社会構造の構成力が、全体の発展の決定要素であると社会主義は考えているのである。

カールマンハイムは、ユウトピアの歴史発展の段階として前述の四段階に区画して述べているのであるが、その全過程に千年至福説が底流として流れ続けて居るのである。マルクスのユウトピアのプロレタリ独裁政治は、社会進化論と千年至福説の論理的結論として述べていると考えられないこともない。或る時点で歴史を超越するユウトピアの実生活に接近していることを歴史過程は示しているが、歴史の実在に接近する時、その形は実質的と共に機能的変化をする、歴史の実在に絶対的対立しているものは、保守的なものの型にならって対立の性格を失う傾向がある。勿論歴史の中に現われている動的な力の形が全く消えることはない。此等の力は共存、相互対立、相互浸透することによって歴史経験を豊富にするのである。此の社会力と理念、思想の形、精神力と密接に結合することによってそれ等の持続や変化が見られるのである。それ等が歴史過程の中に現われることは偶然ではない。存在条件の支配を幅広く行うことの出来る階級は平和な進歩

によって勝利の機会が大であるので、保守主義の道を歩む傾向が大きくなっていく。この事はユウトピアの要素を捨てることを示している。千年至福説の心的特質は、急進的無政府主義の中に具現された時に、政治の場から全く消えるのである。その結果として、政治的ユウトピアさえも取除かれるのである。千年至福説の態度を構成している要素の多くは、サンディカリズムや、ボルシェヴィズムに変形され、その運動の活動の中に同化吸収された。その機能はボルシェヴィズムに帰し、革命行為を神格化するというよりむしろ促進したのである。ユウトピアの強度の減退はもう一つの方向に起きている。各ユウトピアは後期発展段階で形成されたように、歴史的、社会的過程へより近づいていることを示す。此の意味において、自由主義、社会主義、保守主義の各理念は、各異った段階にすぎない。

実際に千年至福説から遠くはなれることと、それへの接近度の相異と見られないことはない。千年至福説の反対の形は、その社会層の運命との密接な関係を持って発展する。然しカール・ポパーは、「人を愛することは人を幸福にすることを望むことを意味する」とのトーマス・アクィナスの言葉を引用し、全ての政治理想の中で人民を幸福にすることは、最も危険な理想であると述べている。他人に高い価値を与えることを企てる。なぜなれば彼等の幸福のために、我々に最も重要であると思われるところのものを人民に理解させることである。彼等の魂を救うことである。それがユウトピアやローマン主義となる。我々には夢のように美しい、幸福な、完全な社会のあることを考える。相互に愛することが出来るならば地上の天国であろう。然し、地上に天国を作るとは絶えず地獄を作るとポパーは言っている。尚、言葉をつづけてそれは宗教戦争を引き起し、宗教裁判によって魂の救済となるであろうと。即ち、福祉やプロレタリア独裁を夢見る社会主義のユウトピアに、道德義務を忘れられているのである。我々に助けを求める人を助けることは、我々の義務であるが、他人を幸福にする義務はない。その事はしばしば我々が好意を持っている人々のプライバシーを侵害する恐れがあるのである。マルクス主義はメシア思想の復活であり、そのメシア王国の選民猶太人の代りに、プロレタリアを置き、万能神エホバの代りに、歴史的必然を置いたのであるとポパーは述べている。換言すれば、千年至福説を科学社会主義と述べているに過ぎないことになる。地上に天国の実現を夢見ていることに過ぎないわけである。日本憲法の中に、文化生活をあらゆる国民がなす権利があるとの意味の条文を規定されただけで、日本人の全てが忍耐の生活を忘れ去り、不正、悪、闘争の渦巻く社会となったことを、誰一人反省しないことも、ポパーの言を借りて言えば、日本人は地獄を作り出す努力をしていると言い得るであろう。

参 考 文 献

- Neusiiss : Utopia, Luchterhand, West Deutschland.
 Thomas more : Utopia, 戸川秋骨訳註, 研究社.
 K.R.Popper : The Open Society and its Enemy, Routledge, London.
 ditto : The poverty of Historism, Routledge, London.
 ditto : Conjectures and Refutation, Routledge, London.
 Karl Mennheim : Ideology and Utopia, Routledge, London.
 プラトン 国家 岩波書店